Title	カール・クラウスと二つのファシズム
Sub Title	Karl Kraus zwischen Nationalsozialismus und Austrofaschismus
Author	高橋, 義彦 (Takahashi, Yohsihiko)
Publisher	慶應義塾大学大学院法学研究科
Publication year	2012
Jtitle	法學政治學論究 : 法律・政治・社会 (Hogaku seijigaku ronkyu : Journal of law and political studies). Vol.92, (2012. 3) ,p.101- 132
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10086101-20120315-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カール・クラウスと二つのファシズム

高橋義彦

- 一 はじめに
- 二 カール・クラウスのナチズム批判
 - (一) 第一次世界大戦批判からナチズム批判へ
 - (二) ナチズムの前代未聞き
- 三 カール・クラウスとオーストロ・ファシズム
- 四 まとめ

一 はじめに

一九三三年一月にドイツでアドルフ・ヒトラーが政権を握り、同年三月にオーストリアでエンゲルベルト・ドルフスが議会を閉鎖し権威主義体制を確立した後、両国の反体制知識人の間で最も関心が持たれていたことの一つは、オーストリアの作家であり思想家であるカール・クラウスが、この事態に對しどう発言するかということであった。

一九世紀末以来、個人誌『ファツケル』を基盤に批判的言論活動を続けていたカール・クラウスは、第一次世界大戦（以下「一次大戦」）後、長大な反戦戯曲『人類最後の日々』を発表しヨーロッパ中で名声を博した。クラウスは同作の成果によりフランスの学界からノーベル文学賞にも推薦されている。また一九二〇年代を通じてオーストリアにおける共和国支持派として知られ、政府の労働者弾圧に抗議し、オーストリアのドイツとの合邦に反対し続けていたクラウスに読者が期待したことは、当然ながらヒトラー並びにドルフスに対する痛烈な批判であったろう。しかし長い沈黙の後、一九三四年七月に刊行された『ファツケル』に掲載された三〇〇頁を超える長大な論文「なぜ『ファツケル』は刊行されないか」(F890-905)の内容とは、ナチズムに対する批判であると同時に、ドルフスのオーストロ・ファシズム政権に対する支持表明であった。ウイーンから遠く離れたエルサレムの地で同論文を読んだゲルシヨム・シヨールムは、パリにいる友人ヴァルター・ベンヤミンに、その内容が「センセーショナル」だと早くも翌八月一四日に書き送り、同時にベンヤミンの同論文への意見も求めている¹⁾。

本論の課題は同時代の二つのファシズムに対するクラウスの態度の相違を検討することで、クラウスのナチズム批判の言説分析と同時に、なぜクラウスがドルフスを支持したのか、またその支持は妥当であったのかを解明することにある。すなわち理論的側面でクラウスのナチズム批判の内容を検討すると同時に、オーストリア政治史の文脈から

クラウスのドルフス支持の理由とその妥当性を検討するという二つの課題の解明を本論は目的としている。

そこでまず本論に入る前に、当時のオーストリアの政治状況とクラウスの対応について簡単な説明を加えたい。一九三三年三月に権威主義体制を開始したオーストリア首相ドルフスは、最大野党であるオーストリア社会民主党（以下社民党）への弾圧を強め、議会から排除すると同時に社民党の武装組織である共和国防衛同盟に解散命令を出し、メーデーの行進も禁じた。以上のような弾圧に対し社民党の一部は一九三四年二月に蜂起するも政府に鎮圧され、社民党は非合法化されることになる。このようにマルクス主義陣営に弾圧を加える一方、ドルフスはオーストリアのドイツへの合邦をもくろむヒトラーとオーストリア・ナチスに対する抵抗も強めた。一九三三年五月に訪澳してきたバイエルン法相でナチ党員のハンス・フランクを国外退去させると同時に、翌六月にはオーストリア国内でのテロ攻勢を強めるナチスを禁止し、党員の逮捕並びに国外退去処分を行った。また自ら所属していた与党キリスト教社会党をも解党させ「祖国戦線」を設立し、一九三四年五月には新憲法を制定し、反マルクス主義であると同時に反ナチズムを奉じ、独立したオーストリアの存在意義を主張するいわゆる「オーストロ・ファシズム」政権を確立させた。

クラウスはこの間『ファッケル』を二号（第八八八号、第八八九号）発表しているが、いずれも友人の建築家アドルフ・ロースへの弔事と自作の詩、並びに自らへの批判記事に対する諷刺を掲載しているのみで、対外的にはクラウスの二つのファシズムに対する「沈黙」が大きな問題となっていた。一方クラウスは密かに『第三のワルブルギスの夜』と題された長大なナチズム批判とドルフス支持を表明した著作を一九三三年の三月から九月にかけて執筆していた。しかし同著の痛烈なナチズム批判が、自らの生命の危険と同時にドイツ国内でのユダヤ人の迫害を誘発するのではないかとの不安から刊行を取りやめた（同著の原稿は彼の弁護士オスカー・ザメクにより国外に持ち出され、第二次世界大戦「以下二次大戦」後ようやく日の目を見ることになる²）。そして同著をもとにした論文を一九三四年七月末に発表した。それが先述の「なぜ『ファッケル』は刊行されないか」である。同論文を掲載した『ファッケル』が刊行されたのは、

奇しくも彼がナチズムに対する闘士として熱烈な支持を表明したドルフスが、オーストリア・ナチスの蜂起により殺害された直後のことであった。

本論の構成としては、まず第二章でクラウスのナチズム批判の内容の検討を行う。まだ十分にヒトラー政権の野蛮性が明らかになってはいなかった一九三三年の段階で、「私は全て可、ヒトラーだけは不可、ということだけしか考えていない」(F890:195)⁽⁴⁾とまで言い切り、ヒトラーとナチズムの危険性を指摘したクラウスにとって、ナチズムの何が問題であったのかを彼の一次大戦批判と関連付けながら明らかにしたい。続いて第三章では、まずクラウスがなぜドルフスを支持したのかを説明する。クラウスにとって絶対悪であったヒトラーに対する最初のレジスタンスとして、クラウスはドルフスを熱烈に支持した。この政治判断には、ナチスに対する抵抗という消極面と同時に、オーストリアの独立維持を主張する「オーストリア・パトリオティズム」の積極的な発露が見られる。続いてこうしたクラウスのドルフス支持の判断が果たして妥当であったのか、ドルフス政権の性格を明らかにしながら検討したい。クラウスはナチスへの抵抗勢力としてドルフスを支持したわけであるが、同時にドルフスは議会主義デモクラシーを否定し、共和国の破壊を行った政治家でもあった。ヒトラーへの抵抗という一点でこうした処置が「全て可」と弁証されるのか検討を行いたい。

一九三〇年代をウィーンで過ごし、クラウス同様にナチズム批判を行うと同時にドルフス政権を支持し、その自伝の中でも自己の政治的態度をクラウスと同一視しているエリック・フェーゲリンは、クラウスの著作について「ナチズムの真剣な研究は『第三のワルブルギスの夜』と同時代の『ファッケル』における批判への言及なくしては不可能」であると述べ、さらに二次大戦後のミュンヘン大学での講義においては「政治に口を挟もうとする全てのドイツの学生にとって、カール・クラウスの『第三のワルブルギスの夜』を読むことは義務である」とまで説いている⁽⁵⁾。本論文が主たる検討対象とするのは、フェーゲリンもその重要性を指摘する『第三のワルブルギスの夜』並びに『ファッ

ケル』第八九〇―九〇五号の論文「なぜ『フアッケル』は刊行されないか」である。

二 カール・クラウスのナチズム批判

(一) 第一次世界大戦批判からナチズム批判へ

それではクラウスのナチズム批判の言説分析から始めたい。クラウスにとってナチズムとはそれまで彼が批判し続けてきた「時代の悪」の集大成のような存在であった。それゆえ彼のナチズム批判には、彼の一次大戦批判におけるようなそれまでの議論に依拠した批判がいくつも見られる。ここではまず、一次大戦批判に代表されるそれまでのクラウスの時代批判とナチズムに対する彼の批判を「連続性」の観点から捉えることで、ナチズムという個別現象に限定されることのない、クラウスが問題視し続けた「時代の悪」が何であったのかを示したいと思う。⁶⁾

クラウスの時代批判の手法とは、つねに批判対象の語る「言葉」に着目して行われる。それゆえ批判対象の語る言葉と現実の乖離、言葉の虚偽性を暴露するという、イデオロギー暴露が批判の第一の手法として挙げられる。その意味でこの批判は、大衆に向かって言葉を語る人々（政治家、ジャーナリスト、知識人）、その媒介たるマスコミニケーション・テクノロジー（以下マスコミ）に向けられることになる。そして同時にクラウスは、こうした虚偽の言葉が新たな現実を生み出してしまうという「創出」機能に対しても批判を加えた。イデオロギー的言辞を無批判に受け取った大衆は、その言葉に誘発され新たな行為を生み出す。そうした虚偽の言葉の受容者側の問題もクラウスは指摘しているのである。

この「言葉」を基準に時代批判を行うクラウスにとって最大の敵は、日増しに影響力を伸ばしているプレス

(Press)であった。当時プレスという言葉は一義的には新聞報道を指していたが、クラウスはマスコミ全体を問題にしているといえる。虚偽の言葉を大衆に向けて拡散させ、さらに新たな行為を誘発するプレスをクラウスは時代の悪の大本と見ていた。それゆえ一九一四年のクラウスは、「世界大戦（一次大戦のこと——引用者注）とはプレスの影響力の一つを意味するに過ぎない」(F404:10)と考えたし、同じように一九三三年には「ナチズムがプレスを滅ぼしたのではなく、むしろプレスがナチズムを生み出した」(F890-905:141)⁽⁸⁾と主張している。彼にとつて戦争の勃発もナチズムの興隆もプレスの成果だったのである。しかしナチズムの最大の問題とは、これまでクラウスが権力との癒着を批判してきたプレスが、むしろ権力そのものについていたことであつた。なりそこないのジャーナリストであつたヨゼフ・ゲッベルスを宣伝大臣に置き、新聞、ラジオや映画などのマスコミを用いて宣伝工作を行うナチスの政体は、一次大戦以来の「インクとテクノロジーと死の三者同盟」(F890-905:142)⁽⁹⁾の完成形態だったのである。

それではまずクラウスのナチズム批判をイデオロギー批判の面から見ていこう。イデオロギー批判という面でクラウスがもつとも問題としたのは、彼自身の造語である「テクノロマン主義」であつた。一次大戦中に考え出されたこの概念でクラウスが批判しようと試みたのは、超近代的テクノロジーと中世的な紋章の「同時性 (Contemporaneity)」である (F474-483:41)。Uボートや毒ガスといったテクノロジー兵器に支えられて商業利害のために行われる帝国主義戦争を、「英雄」や「名譽」といった中世騎士道の概念で裝飾し喧伝することを、一次大戦中クラウスは強く批判した。一方、最先端のメディアであるラジオを用いて民族神話を讃え、反対派の焚書を行うナチスに対して、クラウスは「電気テクノロジーと神話、原子破壊と薪の山の同時性」を指摘している (F890-905:164)⁽¹⁰⁾。ロマンティックなイデオロギーを使って支配を美化しつつ、最先端のテクノロジーを使って支配を強化するナチスの戦術をクラウスは見抜いていたのである。この意味で「鋼鉄のロマン主義」⁽¹¹⁾を語るゲッベルスこそ、まさにナチスの宣伝大臣にふさわしい人間であつた。⁽¹²⁾

また同様の観点から、一次大戦を叙情的文句で裝飾する詩人達をクラウスは強く批判したが、ナチズム批判においても、ナチスを直接的に支持あるいは間接的に受け入れた知識人を厳しく追及している。『第三のワルブルギスの夜』においては、マルティン・ハイデガーやゴットフリート・ベンからヴィルヘルム・フルトヴェングラー、ゲルハルト・ハウプトマンにいたる数多くの第三帝国の知識人が批判の俎上に載せられている。中でも公的にナチスへの支持を表明したハイデガーとベンへのクラウスの眼は厳しい。

周知のようにハイデガーは一九三三年五月二七日にフライブルク大学で学長就任演説「ドイツの大学の自己主張⁽¹³⁾」を行い、全文が同年七月一四日の『ドイツェ・アルゲマイネ・ツァイトウング』に掲載された。クラウスはこのハイデガーの演説から「(民族の精神世界とは) 現存在のもつとも内的な興奮、もつとも広範な震撼の力としての、民族の血と大地の諸力をもつとも深く維持する力なのである」という一文を引用し、なぜ民族が血と大地の力によって興奮し震撼させられねばならないのか、それがどのようにして成功するかというのは、もはや学問上の証明の問題ではなく「信仰」の問題であると批判を加える。そして医学上「血と大地」が結びつくと破傷風の危険性が生じるのと同様に、哲学においてこの結びつきは精神の病の危険性を生じさせるものだとして諷刺している。この「血と大地」というスローガンはナチスが繰り返し用いたものであったが、クラウスはこの語の諸外国での一年分の使用量がドイツでは一日の使用量に値し、まるで血と大地はドイツにしかないかのようなだと皮肉っている⁽¹⁵⁾。きわめて難解な哲学的ジャーゴンを用いながら、ナチスのスローガンをういて政権を支持し、学生に勤勞奉仕や国防奉仕を説くハイデガーをクラウスは「深遠な暴力の代言人」、「ドイツ哲学をヒトラー思想への予備校として手直しするもの」と断ずるのである⁽¹⁶⁾。

このハイデガー以上に頁を割いてクラウスが批判を加えたのがベンだった。クラウスはベンの論文「亡命文学者に答える」⁽¹⁷⁾(同論文はベンのナチス政権への支持に対し、クラウス・マンにより公開書簡で受けた批判への応答として書かれた)をもとに批判を行っている。これは一九三三年五月二四日にラジオ講演という形で放送され、翌日『ドイツェ・アルゲ

マイネ・ツァイトウング』に掲載されたものである。同講演の中でベンは、マンのような亡命していた人間とは、ナチス政権成立以後の「体験」を分ち合うことは出来ない」と主張する。そしてナチス政権の確立とは「新しい人間のタイプ」、「新しい生物学的タイプ」の誕生を意味するのであり、たとえマンがこうした事態を非合理と批判するにしても、非合理こそ創造に近く創造力があるものだと弁護を行う。

こうしたベンの主張に対してもクラウスは舌鋒鋭く反論した。すなわち、「もしベンの言うようにマンのような人物がドイツにとどまっていたら、彼らが（体験）したであろうことは強制収容所への連行であったに違いない。そしてそのように無実の人々を連行し、暴力を振るうことをためらわない人間が登場したことは確かに（新しい生物学的タイプ）の誕生である」と。クラウスからすれば、これは単なる「人殺しのイデオロギー」にすぎない⁽¹⁸⁾。ここでもベンの非合理主義、ナチス体制の野蛮性の看過、そして「英雄神話と疑似科学的ジャーゴンの結合」が批判されているのである⁽¹⁹⁾。

もちろんクラウスはハイデガー哲学やベンの詩の分析評価を行っているわけではない。クラウスが指摘しているのは、そういった彼らの思索と詩作それ自体への判断は留保するにしても、なぜ彼らがそれをナチスのような野蛮な体制と直接に結び付けてしまうのかという当然の疑問なのである（クラウスにとってドイツはもはや詩人 [Dichter] と哲学者 [Denker] の国ではなく、裁判官 [Richter] と死刑執行人 [Henker] の国であった⁽²⁰⁾）。そしてその批判方法は、政治的暴力を言葉で装飾することへのクラウス年来の嫌悪感に基づいたものなのである。

またマスコミの語る「言葉」による「行為」の誘発という問題に関しても、クラウスは一次大戦開戦当初からプレスを「刺激物 (Erreger)」(F404:11) と捉え、報道によって煽られることで戦争への熱狂や排外主義が生まれたと考えていた。すなわちプレスが語る言葉によって、それまで存在しなかった熱狂や憎しみが創出され、それを受け止めた大衆が行為へと移っていくこと（例えば前線への志願や外国人の迫害）をクラウスは問題視していたのである。反ユ

ダヤ主義やナシヨナリズムを煽ることで支持を拡大するナチスにも、クラウスは当然ながら同じ現象を見ていた。

一次大戦後のドイツ、オーストリアでこの例に適していることのひとつが「匕首伝説 (Dolchrosslegende)」であろう。これは同盟国側が一次大戦で敗れたのは前線での戦いではなく、背後からの裏切りのせいであるという、戦後右派によって流布された伝説である。クラウスの表現を借りれば、この伝説によって「戦争責任は、戦争を始めた者たちによって否定され——戦争のせいで生じたものは、講和を結んだせいだとされた」し、「罪は宣戦の布告者たちから講和の署名者に押し付けられた」⁽²¹⁾。現に休戦協定に署名したドイツ中央党政治家マティアス・エルツベルガーは、一九二一年に右翼に暗殺されてしまう。

また、こうした実体なきものの実体化の典型的な例としてクラウスが問題にし続けたものが、ナシヨナリズムや人種主義である。かつて超民族国家ハプスブルク帝国の臣民であり、個々のナシヨナリズムを超えた「オーストリア人」意識を持っていたクラウスにとって、ネーションや人種によって本質主義的に人間の優劣を決めるということは、実体を欠いた妄想に他ならなかった。クラウスはナチスの人種主義に対し、「せいぜいのところ (人種という——引用者注) 妄想にとらわれ、創造に逆らう態度にいたるまで混乱している連中に対して、そうした (人種) の劣等性を認めている」というのが自らの立場であると諷刺的に批判を加えている⁽²²⁾。クラウスは一次大戦時のドイツ・ナシヨナル派に対しても、またナチスに対しても、彼らの持つドイツ・ネーションやアーリア人種としての選民意識がむしろ「ヨシユア的」であると、旧約聖書のユダヤ人の選民意識との類似性を指摘している⁽²³⁾。この意味でクラウスはユダヤ・ナシヨナリズムであるシオニズムにも終始批判的だった⁽²⁴⁾。ネーション、人種の実体化とそれに基づく差別という問題は、一次大戦以前にまでさかのぼることができるような、クラウスの批判対象であった。

このようにクラウスのナチズム批判の手法の多くは、彼が従来行ってきた批判を踏襲するものであった。しかしクラウスはナチズムに対して、これまでのようにプレスや知識人の語る言葉の虚偽性の暴露、さらには彼自身の批判で

対抗することが不可能な、より邪悪なもの、ナチズムの悪の前代未聞さを認めていた（このもはや言葉で太刀打ちすることが不可能であるという無力感が、後述するようにクラウスのドルフス支持の一因になったと考えられる）。次節で見えるように、それはナチスの生み出す言葉のあからさまな虚偽性と、その言葉によって誘発される行為の残酷性であった。

(二) ナチズムの前代未聞さ

先述のように、一九三三年一月にヒトラー政権が誕生した後、クラウスは二冊の『ファッケル』を刊行したが、いずれもドイツやオーストリアの政治への直接の言及のないものであった。しかし一九三三年一〇月に発行された『ファッケル』第八八八号に掲載された一編の詩からは次の詩行を読み取ることができる。

あの世界が目覚めたとき、言葉は眠りについた (P888: 4)。

「あの世界が目覚めたとき」とは言うまでもなくナチス政権の成立のことである。クラウスはこの詩を発表することで、ナチズムという悪に対する言葉の無力さと自らの沈黙のわけを暗に語っていたのである。

クラウスはナチスにおける「言葉」と「行為」の関係を次のようなものとしてみていた。すなわち、ナチス幹部の侵略的、好戦的な演説の「言葉」を批判すると、それに対しては「行為」によってナチスを評価せよと反駁され、一方ナチス黨員の暴力的「行為」を批判すると、そうした末端の行為ではなくヒトラーの平和演説の「言葉」を参照せよと言い返される。そして両者の矛盾を指摘すれば、革命に際しそうした付随現象にとらわれてはならないと諭される⁽²⁵⁾。こうした事態を前に、クラウスは絶望的に次のように語る。「周囲にあるものといえ、ただ混沌と、いかなる理念も持たぬあの理念の、たぶらかしの魔術による呪縛だけだ」(P890-905: 164)⁽²⁶⁾。それゆえクラウスは、様々な演

説や新聞報道などを即物的に併記することで、「ナチスが言ったり書いたりしていることと、彼らが実際行っていることとの間にある架橋不能な深淵」を示そうとした。⁽²⁷⁾ ヒトラーやゲーリングらの演説と同時に、報道される様々な暴力沙汰に関する新聞記事を引用することで、彼らの矛盾を浮き彫りにしようと試みていたのである。しかしクラウスからすれば、このような状況下で「言葉」を用いてナチスを論評したり、批判したりすることはもはや無意味なことであつた。なぜならナチスが平和的な演説を行つたとしても、彼らはそもそもそれを行為に移そうという意志がないのであり、一方で暴力を肯定する演説を行つたとしたら、それは国家に公認された暴力行為を誘発するだけだからである。

クラウスがナチスに対する言葉での批判の無力を悟つたのは、この国家による剥き出しの暴力行使を目の当たりにしたからであつた。『第三のワルプルギスの夜』の中では、ナチスによるユダヤ人や反体制派への暴力行為が、いかに正当化され賛美されているかということが、各国の新聞記事を引用しながら数多く記録されている。また同著においてクラウスは早くも一九三三年の段階で、「強制収容所」の問題を集中的に扱っている。クラウスの目には、自らの著作のタイトルのもつたゲートの『ファウスト』におけるピレーモーンとパウキスの運命が、眼前のドイツで日々現実化しているように思えたのである。⁽²⁸⁾

ナチスの支配下では、ナチスに「内なる敵」と認定された人々は法的権利を剥奪されて暴力にさらされ、この超法規的な暴力を振るう連中が英雄と称される。そして被害者の傷口に文字通り塩が塗りこまれ、かろうじてそこから逃げ出しても片目を失ってしまうような状況下⁽³⁰⁾では、もはやドイツ語において比喩的な慣用表現は不可能である。クラウスは諷刺的に主張する (H890-905: 94-97)⁽³¹⁾。もともと存在した野蛮な行為が、言葉として洗練され残つてきたのが慣用句であるとするならば、慣用句通りの蛮行がなされるナチス政権下のドイツにあつては、慣用句はもはや慣用句としての意味を成さない。

こうした個々の暴力行為の肯定に加え、国会議事堂放火事件のように「事件を裁判にかけるのがその犯人であるという、世界史にも犯罪史においてもいまだかつてなかったような厄介な事件」までもが発生する⁽³²⁾。このあからさまな「言葉」と「行為」の矛盾を前に、クラウスは「言葉」による批判の不可能性を感じていたのである。この絶望状況でクラウスは次のように主張する。

暴力は論争の対象ではなく、狂気は諷刺の主題ではなく。(F890-905: 26)。

その結果クラウスはナチスをもはや言論で倒す相手ではなく、力で打ち倒すべき対象と見るようになっていった。先ほど言及したゴットフリート・ベンのエッセイ「亡命文学者に答える」の中で、ベンが亡命知識人をフランス軍の味方をするものと批判しているのに対しても、クラウスはダッハウを抱えた祖国よりもフランス軍のほうがどれだけ安全だろうかと反論しているし、他の箇所でもヨーロッパ警察の介入をクラウスは求めている⁽³⁴⁾。そんなクラウスがオーストリアの政治家の中でナチスへの対抗軸として期待したのがエンゲルベルト・ドルフスであった。次章ではクラウスがドルフスと彼のオーストロ・ファシズム政権を支持するに至った過程をより詳細に見ていくと共に、その問題点も指摘したい。

三 カール・クラウスとオーストロ・ファシズム

前章で見たように、クラウスのドルフス支持の理由を探るには、クラウスが自らを含めたユダヤ人とナチスに敵対する人々の生命の安全を非常に強く危惧していたことを考慮に入れなければならない。『第三のワルプルギスの夜』

並びに「なぜ『フアツケル』は刊行されないか」では、ナチス政権下での生命の危機と、それに対する擁護者としてのドルフスという側面が強調されている。例えば、ナチスへの批判には生命の危機 (Lebensgefahr) という言葉が使われ、対してドルフスへの賛辞には救済者 (Retter)、「生の救済 (Lebensrettung)」という言葉が繰り返し使われている。クラウスがここまでナチスに脅威を感じていたのは、ユダヤ人であった彼が強迫的にナチスを恐れていたということよりも、実害が彼に迫っていたからに他ならない。クラウスはそれまで何度も自身の講演や作品の上演がナチスに妨害された経験があっただけでなく、かつての友人エーリヒ・ミューザムが逮捕、虐殺され、クラウスにノーベル平和賞の授与を主張していたテオドール・レッシング (1875-1956: 86) も亡命先のチェコで暗殺されるなど、⁽³⁵⁾クラウス周囲の人物にまでナチスの魔の手は伸びていた。またウィーンで起きたオーストリア・ナチスによるユダヤ人商店主の殺害事件も『第三のワルプルギスの夜』の中に記録されている。⁽³⁶⁾このような危機的状況下で、クラウスはナチスへ断固たる処置を取っているように思えたドルフスへの支持を明確にしていくのである。

クラウスが特に賞賛したのは、ナチ党員でバイエルン法相のハンス・フランクのオーストリア入国を拒否した、一九三三年五月のドルフスの処置である。クラウスはこの出来事をフランクが降り立った飛行場の所在地であると同時に、ハプスブルク帝国軍が初めてナポレオンを打ち破った地でもある「アスペルン」という地名を強調することでその愛国的意義を表している。⁽³⁷⁾ (1890-1905: 14, 181)。ドルフスはこの翌月にはオーストリア・ナチス自体を禁止するわけであるが、一九三三年六月という比較的早い段階でのナチスに対する厳しい態度は、クラウスのみならず多くのユダヤ人に支持された。後にイギリスに亡命した作家ジョージ・クレアの回想の中でも、もともと社民党支持者であった父親が、「前任の首相たちと違ってナチスを禁止するだけの勇氣を持っていた」ドルフス支持に傾いていた様子が描かれている。⁽³⁸⁾

しかしクラウスのドルフス支持をヒトラーに反対しているという理由からのみ理解することは、クラウスの熱心な

ドルフス支持の意味を表面的にしか見ないことになる。クラウスがドルフスのナチスに対する戦いをどのように見ていたのかは次の文章からはかり知ることができない。

私はドルフス氏が主要な点で明確な業績を挙げている点以外では、決して彼を過大評価したりはしない。しかし彼は今日の祖国が直面する急務 (Notwendigkeit) を一九一四年のそれと比較するとき、自身を過小評価している。あの時祖国は起きるのではなくむしろ無気力のままでいてくれたほうがよかった。初等読本が賞賛する祖国の「聖なる防衛戦争」へと (in den heiligen Verteidigungskrieg) 二〇年後になって初めて祖国は入っていくのだ。⁽³⁹⁾

一次大戦を強く批判し続けたクラウスは当然のことながらそれを「聖なる防衛戦争」と呼びはしない。クラウスは一次大戦を肯定的に語るドルフスを一面では批判している。しかしその一方でヒトラーのドイツからオーストリアを守る「聖なる防衛戦争」を開始したという点で、クラウスはドルフスを非常に高く評価しているのである。

ここにはクラウスのオーストリア・パトリオティズムの発露が見られる。クラウスは一次大戦時にも、オーストリアへのドイツの影響力の拡大に反対し、単独講和を求めた保守派の政治家ハインリヒ・ラマシュを強く支持していた。⁽⁴⁰⁾ 当時のオーストリアでは、逆説的ながら、多民族帝国としてのハプスブルク帝国の枠組みの維持を主張する保守派が、むしろ積極的な反プロイセン^{II}ドイツ感情と単独講和を主張していたのである。ドルフスとラマシュは共に熱心なカトリックの信者であると同時に、ドイツとは異なるオーストリアの存在意義を説く「オーストリア理念」の主唱者であった。この意味で一次大戦時には反戦という形で発露されたクラウスのオーストリア・パトリオティズムが、一九三〇年代には反ナチスという形で再び前面に出てくるという、クラウスの政治姿勢に一貫する性格が垣間見えるのである。

こうしたクラウスの政治姿勢が当時特に左派から強い非難を浴びたのは、クラウスがドルフス政権を支持したことに加えて、社民党をナチスと等置して厳しく批判したことに理由があった。もともと共和国誕生当初は蜜月関係にあったクラウスと社民党だったが、社民党がクラウスの反対するドイツとの合邦政策を主張し続けたこと、また一部の社民党指導者がクラウスへの批判を強めたこともあって、一九三〇年代には両者の関係は冷え切ったものとなっていた。その両者の関係を決定的に引き裂いたのが、『フアッケル』誌上におけるクラウスの社民党批判であった。

このクラウスの批判は二つの方向に向けられている。一点目はナチス同様社民党の指導者の語る「言葉」のイデオロギー性への批判である。クラウス曰く、ナチスの言葉には「狂気」が、社民党のそれには「空疎さ」がある。⁽⁴¹⁾もう一点はナチスの危機が迫っている時代にドルフス批判を強める社民党の政治的判断への批判が挙げられる。両方の点について具体的に見てみよう。

前者の「言葉の空疎さ」の問題に関して言えば、クラウスは社民党の抱えていた構造的問題——「言葉」の上での革命主義、「行為」の上での改良主義の矛盾——を言い当てているといえる。オーストリアの社民党は、ボルシェビズムとは一線を画した社会民主主義政党として、共和国時代を通じ議会主義デモクラシーの枠内で改良主義的に労働者の生活向上を図るという大きな実績を残してきた。しかしその一方で、一九二六年に採択されたリントツ綱領において暴力革命による権力奪取の可能性を——留保つきながらも——記載するなど、党内左派をつなぎとめる意味での革命的イデオロギーを捨て切れなかった。このことをクラウスは「火をつけるような扇動的演説をするその脇には、消防隊が待っている」社民党の連中と非難している。それを語る当の本人たちが実現する気もなければ、彼らの政策の実態に即してもいない革命的言辞をクラウスは空疎なイデオロギーと考えていた。社民党の主張する「闘争」(この闘争 [Kampf] とどう言葉は社民党の月刊誌のタイトルでもある) とか「権力」とかいう言葉は、「机上の空論」、「活字の濫用」にすぎない。⁽⁴²⁾ この社民党が抱えていた過激なイデオロギー(言葉)と改良主義的实践(行為)の矛盾は多くの

オーストリア政治史の研究者が指摘しているところで、例えばノルベルト・レーザーはこのことを指して、社民党は「羊の皮をかぶった狼」ならぬ「狼の皮をかぶった羊」であつたとその性格を表現している。⁽⁴⁴⁾ クラウスはナチスの血と大地の荒唐無稽な民族神話に「狂気」を、社民党の実現可能性のない革命イデオロギーに「空疎さ」を見ていたのである。

加えてクラウスが問題視したのは、社民党がこういった空疎なイデオロギー的言辞でナチスへの防壁であるドルフス政権を批判し続けていることだつた。社民党は早くからドルフス政権に対し、議会の再開と総選挙を求めていたが、クラウスから見ればそうした社民党のドルフス批判は、むしろナチスの活動への「デモクラシーの防壁」を作り出しているように思えた。⁽⁴⁵⁾ 「そのおかげで生命を救つてもらつてゐる政治的即物性」に「常套句を使って反抗する」社民党に対し、クラウスは「社会民主党の議会的主義的情熱」は「尊敬に値する感情」ではなく「乱暴狼藉」にすぎないと非常に厳しい批判を加えている (F890-906: 13-14)。

当時オーストリアでもドイツ同様選挙のたびにナチスの勢力が増していた。この反国家的勢力にデモクラシーの権利を手渡すことをクラウスは矛盾と考えていたのである。クラウスはこのことを次のように表現している。

ヒトラーがわれわれのデモクラシーに何を企てようとも、彼が容易にデモクラシーを傷つけるためには、デモクラシーは無傷であり続けなければならない。⁽⁴⁶⁾

悪しき意図を持ったヒトラーとナチスが、デモクラシーを使ってオーストリアに進出してくることをなんとしても防がねばならないとクラウスは考えていた。しかし法を乗り越えて暴力を行使するナチスに対し、対抗手段として社民党が訴えていたのは「真正な、力強い、創造的デモクラシー」であつた。⁽⁴⁷⁾ それゆえクラウスからすれば「バウアーの

行う闘争とは、ヒトラー阻止のさなかでの、「デモクラシーのための闘争」に過ぎず（F890-905: 187）、⁽⁴⁸⁾ そうすること
 で逆にナチスを利しているようにしか見えなかったのである。クラウスは議会を閉鎖し、選挙を延期し、事実上デモ
 クラシーを停止したドルフスの措置を次のように支持している。

私は議会主義がヴォータンの復活に際し無力であるという点に関して、まったくドルフスに同意する。デモクラシーは血と大地
 の神話に直面して無力であった。このギャングどもの恩恵による選ぴを普通選挙権で防ぐことはできない（F890-905: 276-
 277）。

後世の視点から見れば、こうしたクラウスのドルフス支持と社民党批判には大いに批判の余地があるだろう。ヒト
 ラーとナチスに対抗するためにドルフスとオーストロ・ファシズム政権に期待を寄せるといふことは、「毒をもつて
 毒を制す」ことであり、ともすれば「毒を喰らわば皿まで」となりかねないような危険な賭けに思える。また一九三
 四年二月の蜂起に失敗し、オットー・パウアーやユリウス・ドイチュなど党幹部が亡命を余儀なくされ、ほぼ壊滅状
 態にあった社民党に対しクラウスの批判はあまりに厳しい。現にこうした政治的立場をとることで、クラウスは彼の
 支持者の多くを失った。冒頭でも登場したベンヤミンはクラウスがドルフスを支持した⁽⁴⁹⁾ ということを『ファッケル』
 第八九〇―九〇五号が自分の手元に届くまで信じなかった。そしてそれを手に入れた後も、シヨールムやヴェル
 ナー・クラフトのような友人に対しこの件に関する直接的な論評は避け、ただ「僕らはもうこの戦線で、この喪失と
 ならべて一言なりと言及に値するような喪失を、味わうことはあるまい」とクラウスの「麥節」を嘆くのみであった。
 ベンヤミン同様クラウスのこの政治的態度にシヨックを受けたのが、後のノーベル賞作家エリアス・カネッティで
 ある。クラウスの講演会に欠かさず通うほどの信奉者で、一九二七年七月の警察当局による労働者弾圧事件⁽⁵⁰⁾ に際し、

警視總監ヨハネス・ショーバーの辞任要求キャンペーンを行ったクラウスを「さながらこの地球上の全正義がクラウスという名前の文字のなかへはいりこんだかのように感じた」とまで絶賛しているカネッティにとって、クラウスのドルフス支持と社民党批判は裏切りのように思えた。彼は自らと同じく熱心な『ファッケル』の読者であった弟のゲオルグへの手紙の中で、次のように激しい言葉でクラウスを非難している。

僕は自分の目を信じるができない。多くの頁から僕には最も信じがたいことが告知されていた。(中略)僕はこんな怪物に影響を受けていたのかと思うと恥ずかしい。僕はあの七月一日の後、彼がショーバーに対して行った闘争がかつて僕に与えたとてもなく、決定的な影響を恥じている。僕は自分の戯曲への彼の影響の痕跡が怖いし、全作品と自分の中から彼を思い出させるものを除去したい。彼は非力な男だが、体罰を与えてやりたいくらいだ。

この書簡の中でカネッティはクラウスを「常套句の達人」と皮肉り、「精神のゲッベルス」、「知識人のヒトラー」とまで呼んでいる。⁽⁵⁵⁾彼の自伝によれば、この『ファッケル』が出版されてからクラウスが亡くなるまでの二年間、カネッティは一度も『ファッケル』のバックナンバーを聞くことも講演会に参加することもなかったという。カネッティのサークルの中では「さながら彼(クラウスのこと——引用者注)が死んでいるかのように」言及されていた。⁽⁵⁶⁾左派の支持者にとって、クラウスはもはや過去の人、「終わった人」であった。アルフレット・プファビガンの研究では、クラウスの死に際し「死者が死んだ」と報じた亡命者の新聞があったことが紹介されている。⁽⁵⁷⁾

当然クラウスはこうした批判がなされていることをわかっていたし、また友人の中には彼に翻意を促すものもいた。しかし彼は自らの態度を変えることはなかった。蜂起した社民党をドルフス政権が徹底的に弾圧した直後である一九三四年三月にプラハでクラウスに会ったハインリヒ・フィッシャーは、クラウスが次のように語ったと回想している。

私はたとえ多くの友人を失ったように君との友情を失うとしても、一つだけはつきりさせておかねばならない。オーストリアの社会主義者の政策は間違っているし破滅的だ。今やヒトラーはドアをたたいて中に入ろうとしている。それなのに彼らは同じ理念の古い世界の中に生きている。彼らはドイツで現実は何が起きているのか理解していないんだ。いつも同じ悲劇だ。人類の想像力は決定的な瞬間にたじろいでしまう。ヒトラーの強制収容所がどのようなものかということ、それを経験したものかそれを想像力の内に経験できる芸術家だけが理解しうる。私に今残された唯一の観点は、ヒトラーはヒトラーであり、彼以上の悪はなく、彼と戦うものは誰でも私の同盟者であり、ドルフスもその一人だということだ。私を賛美するものは私にシュターレンベルクや護国団のようなオーストリアの反動の獵犬どもとも戦えという。しかしその獵犬がヒトラーに向かっていくよう訓練されているのだから、獵犬もまた私の友人だ。(傍点引用者)⁵⁸。

クラウスにとっての選択肢は「ヒトラーの下で死ぬか、ドルフスによって命を救われるか」(F890-905: 294)の二者択一であった。⁵⁹

こうしたクラウスの立場を支持するクラウス信奉者の中には存在した。冒頭で述べたように、クラウスを高く評価するフェーゲリンは、クラウスとほぼ同様の視点からドルフス政権を支持し、社民党を批判している。フェーゲリンは、もともと社民党を支持していた自分がキリスト教社会党を支持するようになった理由を、キリスト教社会党政権がヨーロッパ文化の伝統を代表し、「著しく民主的で習慣に根ざしたオーストリア的伝統」に属していたからだと説明している。そしてドルフスの権威主義国家を、ナチスのようなラディカルなイデオロギー主義者を阻止する「もっとも可能なデモクラシーの擁護者」として弁護している。加えてドルフスをヒトラー同様ファシストと批判し議会の再開や総選挙を求める社民党に対しては、自身をクラウスに重ね合わせながら次のように述べている。

当時、私に最も強い印象を与えたのは社会民主党の指導者たちに代表されるイデオロギー主義者の愚かさであった。経済と社会の面での政治問題に関しては、私は彼らに同意していたとしても、切迫してきているヒトラー的黙示録に直面した際の彼らの黙示録的な夢の愚かさはあまりのものであり耐えられなかった。当時の社会民主主義に対する私の態度はカール・クラウスの立場と同じといえる。この災難を生き延びたイデオロギー的知識人たちは、クラウスが彼らの愚かさに同情するにはあまりに知的だったことをまだ許していない。もちろん、彼らは私も許さない。⁽⁶⁾

フエーゲリンのデモクラシー観では、ナチスやヒトラーの存在を許すデモクラシー社会は形式的なものに過ぎ、実質的にもはやデモクラシー社会ではない。ナチスに加え、言葉の上ではプロレタリア独裁の可能性を訴える社民党も、フエーゲリンはラディカルなイデオロギー主義者として批判の対象にしたのである。

以上のように、クラウスのドルフス支持と社民党批判に対しては、彼の信奉者の間でも正反対の評価がなされている。それは同時にドルフスと彼のオーストロ・ファシズム政権を肯定的に評価するのか否定的に評価するののかという、それぞれの論者の政治的立場を反映したものとなっている。しかしクラウスのドルフス評価には見逃すことのできない問題点があることも事実である。そこで次にこうしたクラウスの政治的態度に対し、二つの観点から批判的な検討を加えていきたい。一点目はクラウスが熱心に支持したドルフスの——反ヒトラーというだけでは正当化し得ない——ファシズム的性格の問題、二点目はオーストロ・ファシズムを支持したクラウスの政治的態度に垣間見える、彼の形式的な政治的権利への意識の低さの問題である。

まず一点目から見よう。ペンヤミンやカネッティの戸惑いからも読み取れるように、クラウスがドルフスを支持するということは左派系のクラウスの読者からすれば信じがたいことだった。なぜならドルフスは、自らを「指導者」と名乗り、好んで制服を着て一次大戦時の前線体験を語り、ムツソリーニに従順で、クラウスが一九二〇年代に

批判し続けた保守派の政治家イグナツ・ザイペルの後継を任じ、さらには反ユダヤ主義的な団体「ドイツ・ゲマインシャフト」に所属している人物であった。ドルフス政権の政策を見ても、それは議会の閉鎖、シュテンデ国家を原理とする「五月憲法」への憲法の改正（これは改正というよりも新憲法の制定といったほうが正しい）、政党の禁止、検閲の導入を含む様々な自由権の制限、議会を経ない政府意志の立法化など、極めてファシズム的色彩の濃いものである。こういった点から、アルフレット・プファビガンはドルフスこそ『人類最後の日々』の登場人物にふさわしいと批判を加えている。⁽⁶¹⁾つまり、ドルフスはクラウスが『人類最後の日々』の中で戯画化したような、むしろ恰好の諷刺対象であったはずだとプファビガンは考えているのである。プファビガンやヴェルナー・アンツェンベルガーのようなクラウスに批判的な研究者は、ヒトラー政権の成立とドルフス政権の成立はその「対抗」関係よりも、その「並行」関係から捉えるべき現象であったと主張している。⁽⁶²⁾

実際クラウスはヒトラーに対抗する「より小さな悪」という以上に、肯定的にドルフスを評価していた。クラウスはドルフスへの入れ込みは相当のものであったようで、彼はドルフスの写真を持ち歩き、彼の暗殺事件の翌日には国会に花輪を送り、未亡人にも弔辞を送ったという。⁽⁶³⁾少なくともクラウスはドルフス個人に対し、かなりの思い入れを持って支持していたことがこうした周辺のエピソードから伝わってくる。これと対照的なことであるが、クラウスはドルフスの後継者であるクルト・フォン・シュシュニクに対し、ドルフスに対するのと同様の熱心な支持を示してはいない。⁽⁶⁴⁾こういった点からも、クラウスのドルフス支持をオーストロ・ファシズムという体制全体への支持というよりも、ドルフスという指導者個人の「気概と精神」への支持と見ることもできないわけではない。⁽⁶⁵⁾だがドルフスをオーストリアの「救い主」と美化することで、クラウスも自らオーストロ・ファシズムのプロパガンダの一部を担ってしまったことは否定しようがない事実なのである。

またクラウスのドルフス支持がヒトラーに対抗するための手段でありえたとしても、そこにはクラウスの政治思想

上の問題が存在している。クラウスは、「確かにオーストリアにはドイツのような強制收容所は存在しないがしかし議会が存在していない」、とドルフスを批判する『闘争』誌における社民党の批判に対し、そうしたことは「些細な欠陥 (Schönheitsfehler)」に過ぎないと反論を行っている (E890-905: 188)。そして先述のように、クラウスは議会主義デモクラシーへの復帰や、憲法遵守を訴える社民党の言説を「常套句」と批判し、ナチスの興隆という非常事態を理由にドルフスの独裁的措置を正当化した。危機の時代にあつては議会主義デモクラシーや立憲主義の形式に違反するなど「些細な欠陥」とクラウスは捉えているわけだが、しかし政治的自由にとって最も大切なことはこうした形式的な原理原則のほゞである。それゆゑ先行研究においても、クラウスとオーストロ・ファシズム体制の「少なからぬ一致」、「親和性」が批判されてきた⁽⁶⁶⁾。危機の時代にあつてクラウスが期待したのは強力な指導者の下での権威主義体制であり、それは「人民による統治」という形式的デモクラシーによる正当化を伴わない「人民のための統治」であつた。クラウスの意図がオーストリアにおけるナチスとヒトラーの勢力拡大を防ぐという点にあつたにせよ、その手段として彼の選んだものが政治的自由を限りなく軽視した権威主義体制だつたことは批判的に指摘しておかねばならない。

四 まとめ

筆者は第二章の冒頭で、クラウスにとつてヒトラーとナチズムとは彼が生涯をかけて問題にしてきた「時代の悪」の集大成のような存在であつたと指摘したが、当のクラウス本人にとつてまだ眼前の現象は「最悪」とは思えなかつた。クラウスは『第三のワルプルギスの夜』の中で、シェイクスピアの『リア王』(四幕一場)から次の一節を引用している。

神よ、事態がさらに悪化せぬと誰に言えましょう？

昔より今はもつと悪くなっています。

そして、さらに悪化するかもしれません。

これが最悪だと言える間は、それは最悪の事態ではないのです。

ここまで見てきたように、一九三三年というナチス政権の最初期に『第三のワルブルギスの夜』を書き上げたクラウスの先見性は、アウシュヴィッツ以後を生きるわれわれにとって明白なことである。⁽⁶⁷⁾クラウスの目にはこの段階でナチスの悪の前代未聞性、アウシュヴィッツへの道が見えていた。たとえドルフス政権を熱心に支持したような政治判断の問題があつたにせよ、彼の時代の危機に対する先見性は評価されてしかるべきである。『第三のワルブルギスの夜』の編者の一人ハインリヒ・フィッツシャーはこの点について次のように注意を促している。

この作品は一九三三年に書かれたもので、一九五二年の読者はこれを読む際につねにこの成立の年から目をそらしてはなるまい。この書物に書かれていることの多くが、今日すでに歴史的なものとして働きかけてくるからだけではなく、とりわけこの点に注目するときに、この文化批評家が恐ろしい未来を当時すでにいかに明瞭に予言していたかを、読者はより十分に認識することができるからである（傍点引用者）⁽⁶⁸⁾。

オーストリア人であつたクラウスは、ただドイツやオーストリア、諸外国の新聞報道を読むことを通じてナチスに関する情報を集め、『第三のワルブルギスの夜』や『ファツケル』の記事を書き上げた。このことに関しフェーゲリンは「いかに精神と理性の人が、ただ新聞を読むということからすでにナチズムについて理解していたかということ

示している」とクラウスを評価する⁽⁶⁹⁾。フエーゲリンが主張するように「ヒトラーとドイツ人」という問題の一つは、ドイツ人がヒトラーとナチスが危険だと知らなかったのではなく、知ろうとしなかったことであつた。この点については、クラウスに批判的な研究者であるプファビガンも、『第三のワルブルギスの夜』を読めば、当時の人間がナチスの行為を知らなかったと言ひ訳することはできまいと評価している⁽⁷⁰⁾。『第三のワルブルギスの夜』の中ですでにクラウスが痛烈に批判しているように、時代の問題とは「想像力の貧困」であり、ナチスの行為以上に残酷な「それを感じない」という残酷さであり、「常套句によつて恐ろしいものに慣れていくその性情」であつたのだ⁽⁷¹⁾。

一九三八年三月一三日、ナチス・ドイツ軍は独逸国境を越えオーストリアに侵入した。ヒトラーはオーストリア国民に歓呼の内に迎えられ、合邦の是非を問う国民投票では九九%以上の賛成票が投じられた。そしてクラウスの周囲の人物に本当の「最悪」がやってきた。クラウスの編集を手伝つていたフィリップ・ベルガーはゲジュタポに連れ去られ恐らく殺害された⁽⁷²⁾。クラウスの出版を担当していたリヒャルト・ラニイ、さらに一次大戦時にラマシユやユリウス・マインルと共に反戦運動に携わつたクラウスの兄弟であるルドルフ・クラウスも、アウシュヴィッツに送られウィーンに戻つてくることはなかつた⁽⁷³⁾。クラウスお気に入り、彼の親族の多くは強制収容所に送られた⁽⁷⁴⁾。一九三六年六月一二日に亡くなつたクラウスは、この「最悪」を予言しながらもそれを見ることはなかつた。しかしミヒヤエル・ホロヴィッツが言うように、もしクラウスが合邦まで生きていたとしたら「ナチスは疑いなくクラウスを殺しただろう⁽⁷⁵⁾」。ナチスによる合邦を通じ、一九世紀末以来のオーストリアの政治、経済、文化を担つてきたウィーン市民社会は完全に破壊された。その栄光の多くをユダヤ系市民に負っている、世に言う「世紀末ウィーン」文化は——ハプスブルク帝国の崩壊した一九一八年一月というよりもむしろ——一九三八年三月をもつて終焉を迎えたのである⁽⁷⁶⁾。

二次大戦終結後、あれほどの歓呼の内にヒトラーを迎え、ナチス・ドイツの教義どおりにユダヤ人を迫害したオー

ストリア国民は、国際政治上の力学の問題で「ヒトラーの最初の犠牲者」としてその責任を免れることになった⁽¹⁷⁾。もしクラウスが病に倒れることなく、強制収容所を免れ、戦後まで生き残ったとしたら、オーストリア国民のこのような自己規定を許すことは決してなかっただろう。いずれにせよこうしたオーストリア国民の自己欺瞞的な「犠牲者神話」への批判を期待するという意味でも、ヒトラーとナチス・ドイツの黙示録的結末への批評を期待するという意味でも、またオーストロ・ファシズムに肩入れした自身の政治的立場への弁明を期待するという意味でも、ヒトラー無き世界にクラウスは生き残るべきであった。「カール・クラウスは死ぬのが早すぎた」⁽¹⁸⁾（ヴァルター・ベンヤミン）。

* 本論文ではカール・クラウスの著作の引用は次のように行った。

・「ファッケル (*Die Fackel*)」からの引用はFと略記し、号数、頁数の順に掲げた。

・「第三のワルブルギスの夜 (*Dritte Walpurgisnacht*)」からの引用に際しては、Suhrkamp 版 (Christian Wagenknecht [Hg.], Frankfurt am Main, 1989) / Kösel 版 (Heinrich Fischer [Hg.], München, 1952) / 並びに Kösel 版を原本とした邦訳 (『カール・クラウス著作集』第六巻、佐藤康彦、武田昌一、高木久雄訳、法政大学出版社、一九七六年) をそれぞれ参照した。それゆえ多少煩雑ではあるが引用に際しては、例えば (*Dritte Walpurgisnacht*, S1/K1 [一頁]) のように、Suhrkamp 版 / Kösel 版 邦訳と三冊それぞれの該当頁数を順番に記載してある。

* 本論の執筆に当たって主に次のクラウスに関する先行研究を参考にした。

Paul Schick, *Karl Kraus*, Hamburg, 1965; Frank Field, *The Last Days of Mankind: Karl Kraus and his Vienna*, London, 1967; Alfred Prähgig, *Karl Kraus und der Sozialismus*, Wien, 1976; Karl Menges, Karl Kraus und der Austrofaschismus, Bestimmungsvorschlag anhand der "Fackel" Nr. 890-905, in: *Colloquia Germanica*, vol. 14, Bern, 1981, S. 313-331; Norbert Frei, Karl Kraus und das Jahr 1934, in: *Osterreichische Literatur der dreissiger Jahre*, Klaus Amann und Albert Berger (Hg.), Wien, 1985, S. 303-391; Werner Anzenberger, *Absage an eine Demokratie. Karl Kraus und der Bruch der österreichischen Verfassung 1933/34*, Graz, 1997; Friedrich Rothe, *Karl Kraus. Die Biographie*, München, 2003; John Theobald, *The Media and the Making of History*, Aldershot, 2004; Edward Timms, *Karl Kraus: Apocalyptic Satirist, The Post-War Crisis and the Rise of the Swastika*,

New Heaven, 2005. 邦語の先行研究としては、邦訳『第三のワルブルギスの夜』の訳者による詳細な訳注と解説のほか、池内紀『闇にひとつ炬火あり——ことばの狩人カール・クラウス』（筑摩書房、一九八五年）、太田隆士「カール・クラウスの『第三のワルブルギスの夜』試論——ジャーナリズムとナチズム」（駿河台大学論叢）第一三号、一九九六年、九七—一二九頁）を参照のこと。

* 欧語文献の引用に際しては、邦訳のあるものはそれを参考にさせていただき、適宜訳語の変更等を行っている。

- (1) 『ペンヤミン＝シヨレム往復書簡』山本九訳、法政大学出版社、一九九〇年、二一七頁。「ウィーン」で発刊されたこの論文が、「エルサレム」のヘブライ大学教授と「パリ」の亡命知識人の関心の的であったことは注目に値する。
- (2) クラウスはこの不安を次のように語っていたとハインリヒ・フィッシャーは回想している。「この書物は、とりわけ、宣伝相の〈メンタリテイ〉についての叙述を含んでいる。彼が私の文章を目にするならば、怒りに駆られ、ケーニヒスベルクの五〇人のユダヤ人を強制収容所の立楯へ送り込ませるようなことが起こるかもしれない。私はどうやってその責任を取ることができようか」(Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, K308 [四一五頁])。ちなみにこの記述はKösel版の編者であるフィッシャーがあとがきで述べている回想なので、当然のことながらSuhrkamp版には記述がない。
- (3) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S261/K239 (三三四頁)。
- (4) Eric Voegelin, *Autobiographical Reflections*, University Press of Missouri, 1989–2011, p. 46 (『自伝的省察』山口晃訳、而立書房、一九九六年、三一頁)。
- (5) Eric Voegelin, *Hitler und die Deutschen*, München, 2006, S. 201.
- (6) クラウスの一次大戦批判については高橋義彦「カール・クラウスと第一次世界大戦」『法学政治学論究』第八六号、二〇一〇年、一三五—一六三頁）を参照のこと。
- (7) クラウスの一次大戦批判とナチズム批判の「連続性」については多くの論者が指摘してゐる。Field, *The Last Days of Mankind*, p. 212; Menges, Karl Kraus und der Austrofaschismus, S. 323; Theobald, *The Media and the Making of History*, p. 70.
- (8) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S307/K280 (三八四頁)。

- (9) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S310/K282 (三八五頁)。
- (10) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S34/K20 (一七頁)。
- (11) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S54/K42 (四六頁)。
- (12) ゲッヘルスのこの言葉のイデオロギー性については、ザフランスキーの次のような解説が参考になる。「鋼鉄のロマン主義」というスローガンには、ナチス政権の現代主義的な基本的特徴が表現されている。この政権は太古の時代に戻ろうと努力したのではなく、高度に技術化され、産業効率に優れ、アウトバーンを建設し、戦争の準備も整った社会を発展させようとしたのである。太古の時代や大地と連帯する夢はイデオロギー上の工芸美術品であり——農業経済の占める割合は低下した——実用主義者たちには本気にしていなかった」。Rüdiger Safranski, *Romantik. Eine deutsche Affäre*, München, 2007, S. 353-354 (『ロマン主義——あるドイツ的な出来事』津山拓也訳、法政大学出版局、二〇一〇年、三八〇—三八一頁)。
- (13) Martin Heidegger, Die Selbstbehauptung der deutschen Universität, in: *Gesamtausgabe*, Band 16, Reden und andere Zeugnisse eines Lebensweges 1910-1976, Frankfurt am Main, 1933=2000, S. 107-117 (『ドイツの大学の自己主張』矢代梓訳、『三〇年代の危機と哲学』平凡社ライブラリー、一九九九年、一〇一—一二六頁)。
- (14) コッペは土壌中に含まれる破傷風菌が傷口から感染することが比喩的に表現されている。
- (15) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S199-200/K179 (二四一頁)。
- (16) コッペのノイチガー批判は、Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S71-72/K58-59 (七一—七三頁) を参照。
- (17) Gottfried Benn, Antwort an die literarischen Emigranten, in: *Sämtliche Werke*, Band IV, Prosa 2, 1933=1989, S. 24-32 (『亡命文学者に答える』山本尤訳、『コッペフリード・ベーン著作集』第一巻、一九七二年、六三—七四頁)。
- (18) コッペのベーン批判はKraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S78-84/K66-72 (八三—九二頁) を参照。
- (19) Timms, *Karl Kraus*, p. 498.
- (20) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S41/K28 (二七頁)。なおこのフレーズは、もともとクラウスが「人類最後の日々」一幕二九場で、劇中の自らの分身たる不平等家に語らせたものである。
- (21) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S88/K76 (九七頁)。
- (22) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S313/K283-384 (三八六—三八七頁)。
- (23) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S160/K139 (一八八頁)。

- (24) クラウスは『第三のワルブルギスの夜』におけるシオニスト批判の文脈の中で、自らを「同化ユダヤ文士 (literarische Assimilationsjuden)」と規定している (Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S154/K135 [一八四頁])。
- (25) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S177/K156 (二二二頁)。
- (26) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S33/K20 (一七頁)。
- (27) Field, *The Last Days of Mankind*, p. 201.
- (28) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S204-230/K184-207 (二四九-二七九頁)。
- (29) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S143/K125 (一六三頁)。ペレーモンとパウキスとは『ファウスト』第二部第五幕に登場する老夫婦のことであるが、この二人は彼らの小さな土地をわがものとしたいファウストの欲望に従ったメフィストフェレスの配下のもに殺られてしまう。エドワード・ティムズは、クラウスがこの二人に「ナチスの暴政の名もなき犠牲者のイメージ」を重ね合わせていると解釈している (Timms, *Karl Kraus*, p. 500)。
- (30) ドイツ語には「片目に青あやを作って逃げ出す (かろうじて逃げ出す)」という慣用句があり、クラウスの諷刺はこのことを指している。
- (31) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S137-143/K121-124 (一五九-一六二頁)。
- (32) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S299/K273 (三六九頁)。
- (33) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S133/K117 (一五一-一五二頁)。
- (34) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S109/K98 (一一八頁)。
- (35) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S106/K94 (一一二頁)。
- (36) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S188/K168 (二二七頁)。
- (37) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S230, 231/K207, 208 (二七九, 二八一頁)。この件に関しては以下を参照。Rothe, *Karl Kraus*, S. 45-46.
- (38) George Clare, *Last Waltz in Vienna*, London, 1981=2007, p. 152 (『ウィーン最後のワルツ』兼武進訳、新潮社、一九九二年、二〇一頁)。同箇所でクレアは次のように回想している。「わたしの父はドルフスのオーストリアに対して、賛否相半ばする意見を持っていた。選挙のたびに社会民主党に一票を投じてはいたものの、ドルフスは自己の信念を確実に実行する勇氣のある男に思えた。オーストリアの良さと独立の必要であることを信じ、父が育ったハプスブルク・オーストリアと外見

だけでも似通った国家を創造しようとしているドルフスに、父は感銘を受けたのだった。とりわけ、この小柄な首相は、前任の首相たちとは違って、ナチスを禁止するだけの勇気を持っていた」。

- (39) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S238/K216 (二九一―二九二頁)。
- (40) クラウスとラマシユ、並びにラマシユに代表される一次大戦時のオーストリアの保守反戦思想に関しては、高橋義彦「カール・クラウスとハインリヒ・ラマシユ——『オーストリアの中欧』理念と第一次世界大戦」(『法学政治学論究』第八八号、二〇一一年、一三九―一六五頁)を参照のこと。
- (41) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S241/K219 (二九五頁)。
- (42) *Ibid.*
- (43) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S242/K220 (二九六頁)。
- (44) Norbert Leser, Austria between the Wars. An Essay, in: *Austrian History Yearbook*, vol. XVII-XVIII, 1981-1982, p. 132.
- (45) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S249/K227 (三〇六頁)。
- (46) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S249/K227 (三〇六―三〇七頁)。
- (47) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S251/K229 (三〇九頁)。
- (48) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S264/K241 (三三五頁)。
- (49) 一九三二年のオーストリアの各種選挙ではオーストリア・ナチスが躍進し、総選挙が行われた場合、国会にナチス勢力が拡大することは不可避と考えられていた。
- (50) ベンヤミンは「はじめに」で紹介したショーレムからの書簡が来る前に、すでに一九三四年七月二六日付のヴェルナー・クラフト宛書簡の中で、クラウスがドルフスを支持したという情報について次のように書いている。「ついでにいえば、クラウスの姿勢について、彼がドルフスの政治をより小さな悪として認容したといった、確実だが信じがたい情報が流れている(確実といっても万全ではないから、頼むが、人には言わないでくれ)(傍点引用者)」。Walter Benjamin, *Gesammelte Briefe*, Band IV, 1931-1934, Frankfurt am Main, 1998, S. 467 (『ヴァルター・ベンヤミン著作集一五、書簡II』一九二九―一九四〇)野村修、高木久雄、山田稔訳、晶文社、一九七二年、九八―九九頁)。
- (51) Benjamin, *Gesammelte Briefe*, Band IV, S. 506 (一〇四頁)。
- (52) この事件は共和国防衛同盟に対する右翼の発砲事件(二人が殺害された)の犯人が無罪判決を言い渡されたことに抗議す

る労働者のデモが引き金となって発生した。暴徒化した労働者は裁判所に放火し、警察当局も強硬策に出て発砲を許可したため、一〇〇名近い死者が出た。同事件とクラウスについては Timms, *Karl Kraus*, chap. 17を参照のこと。Timmsの著作では、当時クラウスがウィーン中に掲示させたという、シヨーパーの辞任を要求するポスターを見ることができるとある (p. 338)。

- (53) Elias Canetti, *Die Fackel im Ohr. Lebensgeschichte, 1921-1931*, Wien, 1980=1993, S. 232 (『耳の中の炬火』岩田行一訳、法政大学出版局、一九八五年、三二五頁)。
- (54) Veza und Elias Canetti, *Briefe an Georges*, Karen Lauer und Kristian Wachinger (Hg.), Wien, 2006, S. 24. 同書簡は『フアッケル』第八九〇—九〇五号の刊行から約一月半後の九月一四日付の「シュトラースブルクから送られている」。
- (55) Canetti, *Briefe an Georges*, S. 25.
- (56) Elias Canetti, *Die Augenspiel. Lebensgeschichte, 1931-1937*, Wien, 1985=1994, S. 267 (『目の戯れ』岩田行一訳、法政大学出版局、一九九九年、三六八頁)。
- (57) Pfabigan, *Karl Kraus und der Sozialismus*, S. 358.
- (58) Heinrich Fischer, *The Other Austria and Karl Kraus*, in: *In Tyrannos, Four Centuries of Struggle against Tyranny in Germany*, H. J. Rehfisch (ed.), London, 1944, pp. 327-328.
- (59) クラウスに対する批判的な研究者であるヴェルナー・アンツェンベルガーは、そもそもこの二者択一のたて方自体が問題であると指摘している。言論人であるクラウスはキリスト教社会党から社民党までを含めた反ヒトラーのオーストリアの国民的統一を目指すべきだったと彼は主張し、そうした方向を模索した同時代の知識人としてエルンスト・カール・ヴィンターを評価している (Anzenberger, *Absage an eine Demokratie*, S. 64)。またアルフレット・プファビガンも同様の観点からクラウスと対置する形でヴィンターを評価している (Pfabigan, *Karl Kraus und der Sozialismus*, S. 345)。
- (60) こゝでのフューゲリンのクラウス論、オーストリア政治論は以下を参照。Voegelin, *Autobiographical Reflections*, pp. 68-69 (五六—五七頁)。
- (61) Pfabigan, *Karl Kraus und der Sozialismus*, S. 351.
- (62) Pfabigan, *Karl Kraus und der Sozialismus*, S. 337; Anzenberger, *Absage an eine Demokratie*, S. 57.
- (63) Field, *The Last Days of Mankind*, p. 228; Timms, *Karl Kraus*, p. 480.

- (64) Frei, Karl Kraus und das Jahr 1934, S. 313-314.
- (65) Schick, *Karl Kraus*, S. 130.
- (66) Frei, Karl Kraus und das Jahr 1934, S. 312; Präbigan, *Karl Kraus und der Sozialismus*, S. 351-352.
- (67) Timms, *Karl Kraus*, p. 538.
- (68) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, K304 (四〇九頁)。同箇所で「一九五二年の読者」といわれている理由は、辛くもナチスの手を逃れ国外に移送された『第三のワルブルギスの夜』がフィッシャーの編集により刊行されたのが一九五二年だからである。
- (69) Voegelin, *Hitler und die Deutschen*, S. 90.
- (70) Präbigan, *Karl Kraus und der Sozialismus*, S. 356.
- (71) Kraus, *Dritte Walpurgisnacht*, S107, 110/K96, 99 (二二五、二二九頁)。
- (72) Schick, *Karl Kraus*, S. 137.
- (73) Timms, *Karl Kraus*, p. 543.
- (74) Field, *The Last Days of Mankind*, p. 236.
- (75) Michael Horowitz, Vorwort, in: *Karl Kraus und seine Nachwelt. Ein Buch des Gedenkens*, Wien, 1986, S. VIII.
- (76) ナチス・ドイツによる合邦を、オーストリア政治文化の決定的断絶と捉える見方は、例えばオーストリアからの亡命知識人であるヒルデ・シュピールの次の主張を参照。「多民族国家の中心で不調和の調和とうたわれたものは、画一的地方色に取って代わられた。(中略) 文学にも、哲学にも、また科学にも、今日のウィーンには、第二次世界大戦前の業績に比べられるものは全く見当たらない。(中略) 少なくとも文化の領域では、一九三八年の合邦の方が、一九一八年の帝国崩壊よりも、決定的な分かれ目だった」(Hilde Spiel, *Vienna's Golden Autumn, 1866-1938*, London, 1987, pp. 25-26 『ウィーン黄金の秋』別宮貞徳訳、原書房、一九九三年、二七五頁)。
- (77) 『犠牲者神話』に関しては増谷英樹『歴史の中のウィーン——都市とユダヤと女たち』(日本エディタースクール出版部、一九九三年、第一章)を参照のこと。
- (78) Walter Benjamin, *Gesammelte Briefe*, Band VI, 1938-1940, Frankfurt am Main, 2000, S. 294.

高橋 義彦 (たかはし よしひこ)

所属・現職 慶應義塾大学大学院法学研究科後期博士課程、助教 (有期、研究奨励)

最終学歴 慶應義塾大学大学院法学研究科前期博士課程

所属学会 政治思想学会、社会思想史学会

政治思想史、オーストリア・ドイツ政治文化史

専攻領域 「都市とメトロポリスの間で——シヨースキヤ世紀末ウィーン論の再検

討——」『法学政治学論究』第八二号 (二〇〇九年)

主要著作 「カール・クラウスと第一次世界大戦」『法学政治学論究』第八六号

(二〇一〇年)

「カール・クラウスとハインリヒ・ラマシユ——『オーストリア的中欧」

理念と第一次世界大戦——」『法学政治学論究』第八八号 (二〇一一年)